

# 扇や通信 '10秋・冬号

一八六八年、戊辰戦争があった時のお話です。

その頃の岳温泉は、山際の十文字岳と呼ばれる所であり、江戸時代の諸国温泉番付では、「陸奥岳の湯」として、前頭二枚目に挙げられていた名湯でした。ここには温泉宿が二十軒軒立ち並んでいて、百人を超える湯女もおり、あちこちから沢山の湯治客がやってきて賑わっていました。

この岳の湯ができる二百年ほど前から山の中腹にあった「陽口温泉」は、難病やけがを治す湯として広く知られていましたが、一八二四年の暴風雨で山の一角が崩れ、温泉が埋没してしまいました。二本松藩は、そのすぐれた薬効を惜しみ、十文字岳と呼ばれる地点まで湯を引いて、温泉を再建したのです。

ですから、宿には藩士たちも足繁く通ってきていましたので、その話の端々から、まもなく世の中がひっくり返るようなことが起きようとしていることを、宿の者も湯治客も肌で感じていました。山の中にも激しい時代のうねりが押し寄せていたのです。

## 吾亦紅色のきもの

ルイは、この温泉宿の一軒で働いている少女で、春に十四歳になったばかりでした。ルイの実家は、猪苗代湖の北の峠近くにあり、父親が炭焼きと猟でくらしを立てていましたが、ルイが十一の歳に病で亡くなり、母も後を追うように逝ってしまいました。ひとりぼっちになったルイのところに親戚がやってきていました。「岳の温泉に奉公さ行かねが？えらく繁盛しているつう話だから、飯くれえは食わせてくれるべー」ほかに生きるすべもないルイは、黙ってうなずきました。その頃は、子供の奉公人を斡旋する

## 吾亦紅、咲く

その宿で働くことになりました。掃除や洗濯、炊事の手伝いや湯女のねえさんたちのおつかいと、ルイは朝から晩までコマねずみのように働きまわした。ほかの奉公人は、「もつと働け！」と叱られるばかりでしたが、ルイにだけは「ちつとは休め」と女中頭のイネがいうほどでした。「んでも、働いてると、父ちゃんも母ちゃんも死んで、おら、ひとりぼっちだつうことが忘れられる…」というルイに、使用人たちから「鬼」と陰口をきかれています。ネも目をうるませてしまいました。三年の歳月が流れ、ルイが十四にな

り商売人がおり、ルイもその男に率いられて、近くの村から働きに出る子供たち三、四人と、てくてく山道を歩いたり荷馬車に乗ったりして、岳の温泉まちに着きました。

通りに向かい合って沢山の宿屋がこつこうと灯をともし並び、湯治客や湯女たちの笑い声がひびいて―生まれ初めて光景に子供たちは目をまんなるにして立ちつくしていました。男が子供たちをつれて、とりわけ大きな宿屋に入ると、その女将はルイを一目見て、「この子にしよう」とい

いました。「しつかりした子のようだね。かたわらの女中頭もつなずいて、「気立てもよさそつで」と、ルイは

つた時、「そろそろ年頃だねえ」と宿屋の女将は、ルイにきものをあつらえてくれました。地味なえんじ色のきものでしたが、深い赤が光のかげんではなやかに匂うようで、すらりと背が伸びて、真つ黒な瞳がきれいな娘に成長したルイによく似合いました。「女将さん、このきもの、吾亦紅の色だなあ。ほら、秋になると野原に咲く…。おら、あの花が一番好きなんです」きものを抱きしめながら目を輝かせているルイをながめて、「おまえも、吾亦紅みたいな娘だよ。誰に見られなくても一生懸命咲いている」と女将は

## 西軍せまる

ほほ笑みました。

岳の山々が初夏の緑に包まれる頃、のどかな風景とはうらはらに、温泉宿は不安と恐怖に包まれていました。大挙して北上してくる西軍に攻められて、白河城、棚倉城が落ち、七月に入つてすぐに平城が落城。七月末には、三春城の降伏を突破口に、西軍は一気に郡山、本宮、二本松に進んで来ました。

二本松藩にも絶対絶命の時が刻々と迫って来ました。いよいよ戦闘が始まる時、二本松藩は、自藩で再建して大切にしてきた岳の温泉を敵に渡すまいと、自らの手で火を放ったのです。

西軍は怒涛の勢いで二本松に入ってきました。藩士は命を的に応戦しましたが、西軍の圧倒的な兵力にはかなわず、一日のうちに落城しました。

二本松の城も町も、そして岳温泉も焼けてしまいました。行くところもないルイは、誰もいない家でも、峠の実家に戻ってみようと決めました。宿の女中頭のイネが、岳の山を一つ越えた村の実家に、ひとまずルイを引き取ってくれました。三、四日休んでいよいよ旅立つ時です。

「若い女ひとり何日も旅するのはあぶねえ。男の恰好して行け」と、イネは古びた野良着をルイに着せ、ぼろぼろの手ぬぐいでほっかぶりさせ、顔に炭の粉をまぶして、笠をかぶせてくれました。食糧を持たせ、「無事だな。

きつといつか、岳さ戻つて来いよ」と泣きました。

温泉が火に包まれようとすると、ルイは命がけて女将にもらったきものを持ち出していましたが、「身軽にしろ」とイネが止めるのも聞かず、「おらの一生の宝ものだ」と、きものの包みをしつかり腹に巻きました。「その、腹が出だ恰好はなんだが狸みてだな」と、イネは泣き笑いしながら送り出してくれました。

ルイが行く奥羽山脈越えの山道は母成峠と呼ばれ、猪苗代湖の北側を通過して二本松城下と会津をつなぐ道です。戦国時代から軍事の要所とされ、伊達政宗もこの母成峠を越えて会津攻めをしています。

西軍は会津に向かっていますから、道中何があるかわかりません。ルイは日の中は、深い森を進み、夜明けや夜は注意深く道を行きました。山育ちのルイですから、町場の男よりしつかりしています。時々木いちごや薬草を食べ、朽ちかけた炭焼き小屋で休み、小さな神社に寝泊まりしながら進みました。

## 出血い、そして別れ

やつこのことで、実家まであと半里ばかりという所までたどりついたルイは、その場に釘づけになりました。あたりのやぶはめちやめちやに乱れ、矢や刀が散らばっていて、道のあちこちに血が浸みています。よく見ると、やぶの中に死体がいくつか転がっている

ではありませんか。「どこでたつたか、戦があつたんだ」ルイは恐怖のあまりガクガクふるえています。

はつと気がつく、やぶの中から人のうめき声が聞こえてきます。ルイがおそろおそろ近づいてみると、一人の兵士が倒れていました。ものあたりがどす黒い血にまみれて、苦しうにもがいています。顔を見ると、まだルイと同じ年頃の少年でした。鎧や衣服の様子からすぐ、会津藩士でないこと



がわかりましたが、ルイは少年に声をかけました。「しつかりらんせー」

少年はうつすら目をあげると、体を起こすこともがきます。どうやら太ももを斬られたらしく、ひどい出血です。ルイは、父親や猫仲間がクマに襲われたり崖から落ちたりしてケガをする度に、猟師たちがする手当を見ていたり、手伝つたりしていましたので、落ちついて自分の上着を脱いで裂き、少

年の太ももをしつかり縛つてまず出血を止めました。家まであと少し。ルイは、少年に肩を貸して必死で歩きました。戦場はもつ、会津城下に移つたのでしよう。あたりはさつきまで戦闘があつたことが夢だつたかのように静かで、初秋の風が峠を渡っていきます。八月二十一日、母成峠で会津軍と西軍の激突があつた日のことでした。

四年ぶりに帰つた家は、荒れ果てていましたが、ルイが奉公に出て行つた時のままでした。少年をねかせ、裏の沢から冷たい水をくんできて、さらしの布を見つけ、父親が残していつた薬を取り出し、ルイのかがいしい手当が始まりました。傷を洗う時、少年は痛さのあまり悲鳴を上げましたが、幸い傷は骨に届いていず、「これならなんとか治るべ」とルイがいうと、少年はやつと笑みを浮かべました。

少年がうつと眠っている間に、ルイは、女将にもらったきものを抱え、山道を走つて、親戚の家を訪ねました。奉公を勧めてくれたその家の主も、二本松と温泉泉の悲惨な様子を伝え聞いてはいましたが、ルイがひとり帰つて来たのにおどろきました。

「これと、何か食い物を交換してくれろ」とルイがきものを見せると、その家の女房は目を丸くして「これは上ものだべ。やっぱり、繁盛してる宿に奉公するもんだなあ」と、きものを自分押し当てて、上機嫌で粟やそば粉や少しの米を交換してくれました。こ

れで、ルイと少年のさしあつたての食糧はなんとかあります。ルイの懸命の看護のかいあって、十日ほどで傷がふさがり、少年は立ち上がれるようになりました。「さて、次は足ならしたよ」ルイは、少年を外に連れ出します。まだ痛みも麻痺もあつてよく動けず、汗だくで歩く練習をする少年と、励ますルイ—もしこの様子を見る者がいれば、仲のいい兄妹に映つたことでしょう。

ある日、いつもの足ならしの後、小高い丘に並んで一休みしていた時、少年がいました。「これまで名乗りもせず、無礼をいたしました。拙者は、薩摩藩士・木村吉太郎と申す。この会津で西軍を助けては、そなたにどんな禍がふりかかるかと、それを案じていた。もし、人に咎められた時、この者はどこの誰かまったく知らぬ。ただ通りすがりに拾つた見知らぬケガ人だ、とそなたが言い張れるようにしようと考えた。会津には憎い敵を、こうして助けてもらった。この恩は決して忘れぬ——吉太郎は不自由な足で立ち上がる、と深々とルイに頭を下げました。

「なにゆつた。誰に何とがめられても、おらはおつかなくねえ。父ちゃんも母ちゃんもいなくなつて、あとはなくすものは何もないもんな。それに、困つた時はおたがいさまだべ」ルイはそういうと、立ち上がつて、「おらは、ルイといいます。ことし十四」と、ペコリとお辞儀をしました。「おお、拙者も同じ十四じゃ」と吉太郎。二人は

声をあげて笑いました。峠の下の戦争がうそのようなひとときでした。

また幾日かたって、吉太郎の足はしだいに回復していきました。

九月の満月も過ぎた頃、吉太郎がいよいよ会津城下の西軍に合流して戦に加わる時が近づいてきました。

二人は、最後の足ならしに丘に登った時、吉太郎は、故郷・薩摩の話をしてくれました。勇ましく火を噴く桜島のこと、遠い外国につながる広い海のこと…海を見たことのないルイが、「海って、どれほどでかいんだべ。猪苗代湖よりも広いんだべが！」と目を輝かせると、吉太郎は腹を抱えて笑いしました。お日さまのように明るく清々しい吉太郎の笑顔を見、ルイは初めて見ました。「ああ、こんなに笑ったのは久しぶりだ。それにしても、ルイ殿は、たのしいお人じゃ」吉太郎はまたカラカラと笑ったあと、真顔になって、「いつか、ルイ殿に薩摩の海を見せたいものだ。」と、遠い空をみつめていいました。ルイの心に、見たことのない青い海が輝きました。

九月二十日夜明け、吉太郎が単身、会津城下に入る時が来ました。母成峠の戦鬨で腿を痛めた足は不自由で、駆けたり跳んだりとはとてもできない体で、また戦をするのです。

ルイは、吉太郎を城下の入り口まで送ることにしました。二人が別れ別れになる時がどんどん近づいてきます。峠を越えながら「なんでこんな戦しね

ばなんねんだべ」ルイがいうと、吉太郎は答えました。「新しい時代を開くためです。」「ここにいっぱい人が死なねえと、新しい時代は来ねんだべが…。新しい時代ってなんだべ」ルイがため息をつきましたが、吉太郎は黙って歩くばかりでした。

城下町が見える丘にさしかかると、吉太郎は立ち止まり、しみじみルイを見つめると、かたわらの草地に咲いていた吾亦紅われもこうの花を一輪摘んで、ルイの髪にそっとさしました。びつくりしているルイの両肩に手を置いて、「ルイ殿、美しいぞ」とほほ笑むと、くるりときびすを返し、足を引きずりながらも一気に丘を駆け下りていきました。朝もやとルイの涙の中に吉太郎の後姿が溶けて消えていきました。

### 戦場を駆ける

ルイは、ほんやりともやの中にたたずんでいました。「これからおらはどうしたらいいんだべ…」来た道を戻ったところで、誰もいない家が残っているだけ。父親のように猫も炭焼きもできない。岳の温泉も燃えてしまった…。

ルイは、ふらふらと丘を下りて行きました。するとドーン、ドーンという大砲の音にまじって、沢山の人が叫ぶ声、バアーン、バアーンと鉄砲の音、また叫び声—ルイのすぐ先は戦場でした。「あそこに吉太郎様がいるんだー」ルイは、雷に打たれたように戦場に向かつて走り出しました。

そこでルイが見たものは、血だらけで倒れている沢山の人間、死んでいる者、うめき声をあげて苦しんでいる者、ルイは、小さい頃、村の寺で見た地獄絵図を思い出しました。「これが地獄なんだ…」茫然と立ちすくんでいるルイの眼に不思議な光景が映りました。

女の人が、大八車を引いて戦場をガラガラ走り回っているのです。その人は、倒れている人を助け起こすと、車に乗せ、また次の人を助けて車に乗せていきます。ルイは思わずそこにかげよりました。「おらも手伝う！」女の人は眼でうなずくと、ケガ人を乗せた車を引いて近くの寺に向かいました。ルイが力いっぱい車の後押しをします。

寺の広い本堂にはケガ人が沢山寝かされていました。会津軍も西軍もいます。ルイは思わず西軍のケガ人に駆けよって一人ひとり確かめました。吉太郎は見当たりませんでした。女の方は、素早く応急手当をしようと、またカラの車を引いて戦場に駆けて行きます。ルイも一緒に走りまわりました。

こうして、女の人は何人ものケガ人を助けて看護していたのです。ルイも懸命に手伝いました。その晩遅く、ようやく手がひとまず空いたときに、初めて女の人が口を開きました。「手伝ってくれてありがとう。私は、イワといいます」戦場を駆け回っている時は鬼のように見えましたが、こうしてみると、仏さまのようにやさしい顔です。「なんでこんなに危ないところで、

大変なことを、女の人ひとりでやっているんですか」ルイがたずねると、イワはほほ笑んでいきました。「私はね、小さい時に両親を亡くして、十六で一緒になつたつれあひも若いうちに死んで、自分が生きていたってしょうがない、いつぞ死のうとしたのです。でも親しくしていたお寺の和尚さんに教えられました。捨てようと思う命なら他の人のために使いなさい、と。それで今、こうしているのです」

ルイは、ただおどろいてイワのおだやかな顔を見つめるだけでした。

夜の間もイワは一睡もせずケガ人の看護をし、夜明け前からまた戦場に出かけました。ルイも一緒に。「ルイさんは、看護が上手だね。私のそばにずっといて手伝ってもらえませんか。これからも沢山の人の役に立てるように、うんと勉強するんですよ」イワの言葉がうれしくて、ルイはいちだんと力を入れて大八車を引っ張りまわした。

戦争は最後の局面に入り、戦鬨の激しさも頂点に達しました。城下町は焼き尽くされ、会津軍は追いつめられています。鉄砲や大砲の弾が飛び交い、戦鬨の怒声や悲鳴が渦巻いてそこは修羅場でした。イワはそんな中でも、ケガ人を助けて回ります。ルイも必死です。鉄砲の弾がびゅんびゅん飛んできますが、まるで天が守ってでもいるかのように、イワとルイには当たりません。二人は泥と血にまみれてけが人を助けて回りました。

—そして、九月二十二日、会津落城。イワとルイが走る大八車の音も、この日で止まりました。

戦が終わった翌年、会津藩士の墓が建てられました。町の一角に西軍墓地も作られました。西軍も沢山の戦死者を出しました。その墓地には、ごく一部の若い兵士が葬られました。十四から十八歳の少年たちが薩摩、長州からはるかな会津までやってきて、若い命を散らしたのです。墓地ができるまで、ルイは飛んで行って墓石に吉太郎の名前を探しましたが、どれも知らない少年ばかりでした。

戦が終わった後も、イワは働きつづけました。戦死した会津藩士の子供たちのために、学問所を作って将来を開く道を作ったたり、東京に行つて貧しい人の救済の仕方や組織づくりを勉強したり、そこから戻つてくると、貧しい人、孤児、出獄者、失業者などに救いの手をさしのべ続けました。

イワのそばにはいつも影のようにルイがいました。汚い仕事も辛い仕事も危険な仕事も、ルイはいつも明るいまなざしで黙々と取り組みます。ルイの周りはいつも、小さなお日さまが照っているようでした。イワはそんなルイを「私の宝物です」と周りの人に自慢しておりました。

そんなルイに縁談も沢山ありました。が、「私はイワ様とずっと一緒に働きます。」と耳も貸さず、イワを心配さ

せたり、喜ばせたりしました。

イワが六十八歳で亡くなると、ルイは、イワの仕事を引き継いだ人達を助けて、休むことなく働きました。そのルイの心の中には、「いつか、薩摩の海を見せたい」といった吉太郎のことばと清々しい笑顔が、消えることのない灯になって燃えておりました。

戊辰戦争が終わつてから七十年近い歳月が流れました。

ある秋の日、八十を超えたルイが、久々に西軍墓地にお参りに行きました。いつもは訪れる人もなくひっそりしている墓地に人影があります。見ると、白髪の老紳士とその夫人らしい品のいい女の人が、墓の一つ一つを回つてお参りしています。ルイが近づいて声をかけました。「西軍にゆかりの方ですか？」すると、老紳士が言いました。「はい。ここに先の戦で死んだ、私の仲間が眠つております。私もこの会津の地で戦をしましたが、こつして生きながらえて…」

ルイは、そこに立っているのがやつとでした。

「私たちがここにきていたのは、墓参りだけではないのです。私の命の恩人をずつと探しておりました。その人に助けてもらわなかったら、私は母成峠で死んでいた…」紳士はそういつて遠い空を見つめました。

「でも、その方の、ルイという名前しかわからず、八方手をつくしてもど

うしても見つからないままで…」と夫人も眉をくもらせました。

「いや、見知らぬ方にこんな話をし失礼しました。それにしても、こつしてここに來られたあなた様も、西軍にゆかりの方ですか？」とたずねる老紳士に、ルイは、震える声を抑えていました。「いいえ、この近くに住んでいるものですから、時折、お参りさせてもらいます。」

「それはありがたい。私は歳も歳、病気も抱えていて、ここに来るのはこれが最後でしょう。後をよろしくお願ひします」紳士はそういつと、帽子を取つて頭を下げました。そしてまた空をながめて、「会津の峠には吾亦紅われもこうがきれいに咲いていました。今もわすれませんよ」

「それにしても、ルイという方が今もお元気で、幸せでおられるといいですねえ。」と夫人が言いました。「きつと運者でいますよ」ルイはほほ笑んで答えました。

会津の早い秋が、あたりを暮色で包みはじめました。「では、私たちはここで…」二人はゆつくり墓地を出て行きました。

夫人に腕を支えられて、少し足を引きずりながら歩いていく紳士の後ろ姿が、遠い日の丘の上で足ならしをした吉之助の姿と重なつて、ルイの涙の中で溶けて消えました。

墓地を囲む木立をふるわせて、風が通つていきました。

あの戦から、さらに百四十年の時がたちました。岳温泉は現在の場所によりみがい、西軍墓地には、今も少年たちのみ霊が静かに眠つています。そして、二本松と会津を結ぶ母成峠には、吾亦紅われもこうの花が、今も深い赤を秋の日に光らせて咲いています。

●瓜生イワ（一八二九〜一八九七）は、会津出身の、慈善事業家、社会児童福祉家の先駆者です。一生を慈善と福祉に捧げ、現在も福祉の功労のあつた女性には「瓜生イワ子賞」が贈られています。イワが活動した喜多方、福島、東京には、ほほ笑みをうかべたイワの銅像が建っています。

●母成峠は、今、自動車道・母成グリーンラインとなり、大自然の中のドライブコースとして人気です。峠近くの林の中には、今も戊辰戦争の土塁らしいものが残っています。

●西軍墓地は、会津若松市大町にあります。★くわしくはフロントにおたずね下さい。

岳温泉 野の花一輪香る宿

---

政府登録旅館



あだたらの宿

# 扇や

---

福島県二本松市岳温泉1-3  
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004

元氣なスタッフがお待ちしております。